

小島烏水全集

第二卷

小島烏水全集

第二卷

大修館書店

小島烏水全集 第二卷 (第十回配本)

定價八八〇〇圓

昭和五十八年四月二十日印刷
昭和五十八年五月一日發行

著 者 小 島 烏 水

發行者 鈴 木 敏 夫

印刷者 青 木 勇

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三十二四
電話〇三(二九四)二二二一(代表)
千一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

第二卷 目次

「文庫」時代 一

《明治二十八年》

歴史家としての曲亭馬琴

《明治二十九年》

反古の一軸

鳴立澤

閨秀小説中の「萩桔梗」を読む

函嶺紀行

横濱に於ける外商と内商

『堀川波の鼓』を読む

夢の跡

殘星氏の評言に就きて

一葉女史

西湘山水

《明治三十年》

いかにして文を作らん乎

含忍坊に答ふ

黃茅白葦

黑風白雨

『戸部史談』の後に書す

讀不書生に

後進生に

亞山藤江要一郎君

《明治三十一年》

春蚓秋蛇

明治小説家月旦

七四

七五

九二

一〇六

一〇九

一一一

一一七

一二三

一二五

一二七

一三〇

一三一

一三七

鬻體 孟

一四七

花筏に與ふ

一五二

花筏に答ふ

一五四

《明治三十二年》

妙義山の秋（付秋曉評）

一六三

藤原長親事蹟考

一六七

無緣塔

一六四

函嶺春信

一六八

批評につきて吾所思を告白す

一七一

野水に與ふ

一七六

張りかへ障子

一七九

情 史

一八三

歌二氏に謝す

一八四

『千山萬水』を読む

一八四

或人に答ふる書

一八五

『煙霞小景』に題す

卷頭に書す

鬼百合姫百合

瀧澤秋曉

河井醉茗

五十嵐白蓮

燒木 杭

少年俳優

大人物

佛人と邦人

佛教徒に告ぐ

竹田出雲の原作と櫻痴先生の改作

牛門の
二秀才 泉鏡花と小栗風葉

拾 遺

松の落葉一ツ二ツ

《明治三十三年》

誌友諸君に白す

南阿の新建國

三宅雪嶺と志賀矧川

内村鑑三

中江兆民

「少年世界」記者を誠しむ

無一物

「明星」を読む

古今人物

「古今人物」に就て

平清盛

石田三成

井伊直弼

楠正成

平政子

二九

三〇〇

三〇一

三〇三

三〇四

三〇七

三〇九

三一〇

三一

三二

三三

三五

三九

三〇

三二

『七寸鞋』を読む	三二四
紀行文と歴史	三二六
詩人透谷	三二九
高山氏	三三二
人道の勝利	三三三
『有明月』を読む	三三五
寄木細工抄	三三九
文藝雜俎	三四九
開書	三五〇
落葉紛々	三五四
《明治三十四年》	
文壇に於ける「文庫」の位置	三六〇
今日の新聞	三八〇
佛蘭西の士氣	三六七
「頭陀袋」の募集に就きて	三九二

路傍の石	三九四
童兒は饑ゑたるなり	三九六
壹岐對馬	三九八
名媛の詩	三九九
趣味に就て	三九九
諸家の文	四〇四
「文庫」第百號に題す	四〇九
春期松風會の記	四一〇
松籟颯々	四一九
梅村騷動	四二〇
『文壇照魔鏡』について	四三五
中村春雨「無花果」に就て	四三七
『落梅集』を読む	四四二
秋の朝寫生	四四五
新派歌人評論	四五二

海の香

四六五

讀不書生に答ふ

四六七

天隨著作四種

四七一

《明治三十五年》

火中書

四七四

明治史の二悲劇

四八三

新古著作月旦

四八九

『平家物語』

四八九

再び『平家物語』に就きて

五〇〇

『竹取物語』

五〇二

『浮世風呂』

五〇六

蛇足紀行

五二二

花

五四三

雄たけび

五四五

「心中おさよ新七」細評

五五四

「暮秋野徑の石にもたれて」

『日本の柱』

「頭陀袋」募集

『日本外史』第拾壹卷論評

暮春雜筆

裸美人像

鳴雪先生に

『旅行談』序

『旅行談』抄

鐵砲爭論

名優馬物語

箱根山中の首縊り

解題・解説

五八

五九

五九

五二

六二

六三

六七

六八

六八

六六

六八

六九

近藤信行 六三

小島烏水全集

第二卷

「文庫」時代
一

《明治二十八年》

歴史家としての曲馬亭

余は常に好みて馬琴の小説を読み、馬琴の文章を誦せり。然れども、只だ其趣向の偉大、其行文の瑰麗を愛づるのみ、只だ其忠孝の二字を捉へ來りて、武士氣質を直寫し、其過去の三百年を假り用ゐて、江戸の失政を曲描せるを見たるのみ。未だ小説以外、戯文以外、彼が歴史家として、伎倆の超逸なる、着想の拔群なるを知らざりき。

頃者偶ま彼の「平豊小説辨」を読みて感ずる所あり。此の文、平清盛を白河帝の御子といひ、豊太閤を後奈良帝の落胤なりと云ふを辨ずるなり。彼先づ論じて曰く、「小説野乗の信じ難き、誰か董狐の言を俟べき。然るに猶世の讀書の人、唯その舊きに因循して、曉らざるもの多かり」と、彼が歴史家としての本領、自ら此の一言に在りと存ず。當時の所謂儒者、史家なるもの、博學洽聞、能文勁辯を以て誇ると雖も、多くは書を読むは、紙に向ふと同じく、史を繙くは、字を誦せんがためなるに似たり。舊史若し古人の一を惡と斷ずれば、即ち惡と信じ、善と揚ぐれば、即ち善と思ひ、悉く其の後塵を追ひて走り、英雄は英雄、奸物は奸物、

白き者は芙蓉峰の雪、黒きものは崑崙山の土と、人も定め、我も定め、然る後に筆を執りて彩色し、朱紫を塗抹するのみ。故に千の筆より成りたる千篇の史冊、殆ど一人の手に出でたるが如く然り。此等の人々に向て、何ぞ紙背に徹するの眼光を望むを得んや。曲亨さすがに識見卓拔、その舊きに因循して、曉らざるものを警しめんため、『昔語質屋庫』其他隨筆、雜纂數十種を撰べり。

今此の「平豐辨」を讀むに、豐公の段に及び、日輪の一條を辨じて曰く、

寛永の末の頃、羅山林先生台命によりて書つめたる、「將軍譜」にも之を載て云。「秀吉不知其所生。或曰尾張國愛智郡中村郷筑阿彌子。其母夢三日輪入懷中而生之。故名曰吉。」これも當時の小説を取られたるものながら、これより外に正文なし。然れども世の人の、秀吉公の實父の名をだに知たる者のあることなきに、まいて未生に其母人の夢物語を誰か知るべき。

と説破し、豐公朝鮮の役、彼の國王に送りたる書翰中、自ら日輪云々の言をなしたるを、「自ら神にせんとて、此時猛に云々と書示させしも知るべからず」と疑へり。是より『東國太平記』『豐臣譜』『成形成圖記』等諸書を引用して、其皇胤にあらざるを辨じ、

皆是當時の稗説にて、鑿空無根の言なるべし。人の奸事に走ること今も昔もかはらねど、（中略）豐太閤は英雄也、至尊の落胤ならずといふも、誰か之を賤むべき。思はざること甚し。

と英雄崇拜者流の頂門に一針し、更に鐵案を下して曰く、

かゝれば豐公の事實を取て、筆に載せんと欲するもの、未だ織田家に仕へざりし已前の事は闕如して

可也。獨り竹中丹後守重固の書つめたる、『豐鑑』卷の一に云ふ。「羽柴筑前守豐臣秀吉、天文六年丁酉に生れ、後に關白になり昇りたまふ。尾張國愛智郡中村とかや、熱田の宮よりは五十町許乾にて、萱ぶきの民の屋わづか五六十ばかりやあらん郷の、あやしの民の子なれば、父母の名も誰か知らむ、一族などもしかなり。(下略)」予は此說に従ふべくおぼゆ、その事すべて實にしてその文青史に耻ぢずといふべし。

と斷言せり。此一段未だ引證該博と稱す可らざるも、議論明快、史に讀まれ書に迷ふ者をして、渺茫の平野に一髮の青山を認めしむる如し。依田學海氏、本文の後に書して曰く、

古より卑賤にして高爵に陞り、匹夫にして天下を取るもの、多くその系譜を偽造し、或は又鬼神の事に寄托して、己が凡人ならぬを人に知らせんとするもの、和漢ともに然らざることなし。始祖の人は固より豪傑なれば、さまでに自ら誇る心もあらざらめ。その子孫に至り、これを偽り作るもあるべし。鬼にもかくにも眞實ならぬ事ぞ多き。琴翁の辨、詳にして漏すことなし。(中略) 豐公の父の姓名は、「逸史」「外史」などにも慥に載せて、人多く之を信ず。琴翁は斷して『豐鑑』に従ひ、其父の姓名を知らずとす、見識高し。これ等は竹山、山陽の上に出るといふも過たりとすべからず。(下略)

と、誰か此評を當らずと云ふや。蓋し今日より是を觀れば、敢て新説と稱するに足らざるべしと雖も、當時所謂大儒者、大史家の採りたるを採らずして、自己の見を採る、余は曲亭の見識が、群小説家は言ふまでもなく、時として、大儒者、大史家を凌ぐ點あるに服す。